

## 第二次世界大戦下の日本とスペイン関係と

### 諜報活動 (二・完)

ゲルハルト・クレープス

田嶋 信雄・井出 直樹 訳

- 一 スペイン内戦勃発から防共協定加入へ
- 二 ヒトラーの外交政策構想における日本とスペイン
- 三 スペインと太平洋戦争——協力の時期(以上『成城法学』第六三号)
- 四 一九四二年における戦争の転換とスペイン
- 五 フィリピン問題
- 六 フランコの和平仲介努力
- 七 日本とスペインの断交
- 八 一九四五年以後の日本とスペイン(以上本号)

#### 四 一九四二年における戦争の転換とスペイン

このようにアメリカ合衆国の防諜活動は成果をあげたが、スペインにおけるドイツおよび日本の立場が弱体化し

たのは、日独の軍事情勢の急激な悪化の結果であった。スペインでは「青の師団」の帰還を求める声が大きくなったが、この計画はヒトラーの抗議により失敗した。ファランヘ党の影響力は目に見えて衰退し、君主主義者、つまり親西欧派の勢力が増大し始めた。これに従って、外相セラノの立場も揺らぎ始めた。

一九四二年六月に新任アメリカ合衆国大使ハイエスを接見した時、フランコは次のような考えを申し述べた。そしてそこに示された慎重な考えは、翌年にはより明確な輪郭を描くこととなる。つまりこの時フランコは、連合国のヨーロッパないしアフリカでの上陸作戦はなお実行困難であるとの認識を示し、さらに、ハイエスに対して、枢軸側と和平を結ぶことが望ましいとの考えを示唆したのである。なぜなら、それによりアメリカ合衆国の全力を太平洋に集中することが出来るからである。フランコがはつきりと述べた見解によれば、世界では二つのまったく別々の戦争が戦われている。第一にヨーロッパではソ連に対する戦争、第二に太平洋では日本に対する戦争である。民主主義諸国の勝利は同時にロシア共産主義に対する勝利を意味しよう、というのがフランコの考えであった。<sup>(13)</sup> さらに同年九月、フランコは、アメリカ合衆国のパチカン駐在特別公使マイロン・テイラーに対し、さらに明確に自分の考えを述べた。フランコはテイラーを説得し、ヨーロッパへのアメリカの介入を思い留まらせようと試みたのである。フランコは、ヒトラーはイギリスの独立を脅かしている訳ではないとの見解を示し、むしろアメリカ・イギリス・ドイツ・イタリアおよび「全キリスト教世界」の重大な共通の敵は「野蛮で東洋的・共産主義的なロシア」であると位置づけたのである。フランコによれば、太平洋の戦争は、ヨーロッパでの戦争とはまったく別個に戦われているものであり、その性格において異なるものであった。<sup>(14)</sup>

つまりフランコは、スペイン・枢軸国および西欧連合国の間ではソ連に対抗する利益共同体の形成が可能であり、その存在は究極的には日本に不利に作用するであろうと考えたのであった。フランコがかつてセラノの日本援助政策を全面的に承認していたかどうかは疑わしい。ヨーロッパ的・キリスト教的理念に刻印されたフランコの

世界像と日本との同盟は合致せず、また、ソ連に対する彼の考えには、非ヨーロッパ列強へのパニックにも似た恐怖心がつねに表現されていた。一九四二年九月初めにセラノに代わって親英的な傾向をもつホルダナ伯爵が外相に就任した時、フランコの外交政策がより明確な輪郭を描き始めた。やがてスペインの対日関係も変化するようになる。日本もドイツと同様に、迅速な勝利を求めるスペインの期待を満たすことが出来なかったのである。<sup>(136)</sup>

外務大臣の交代とともに、諜報活動の分野でも困難が顕在化し始めたようである。ベラスコは須磨大使に事実を告げ、諜報組織の建設と維持はセラノのまったくの個人的な発案によるものであり、セラノ自身が業務上必要な連絡手段を手配していたと述べた。ベラスコによれば、セラノの後継者ホルダナとはまだそのようなコンタクトを形成しておらず、したがって彼は諜報員達に、しばらく報告を送らないよう指示したという。<sup>(137)</sup>ホルダナの就任によっても須磨の情報源は完全に枯渇した訳ではなかったが、スペイン政府との直接の関係は途切れたことがやがて明らかとなる。

新外相は、たしかに枢軸側との協力を継続するとベラスコに約束したが、同時に、あまり露骨に諜報活動を外務省業務と結びつけないよう求めた。<sup>(138)</sup>当時スペイン政府は非常に慎重でなければならなかった。なぜなら——須磨の報告にもあるように<sup>(139)</sup>——連合国側がモロッコに上陸する兆候が見られたからである。スペインはアフリカに領有している領土を失う可能性があり、さらに、スペイン本土でさえ上陸される危険があった。

一方でドイツ軍が進駐して来る恐れもあった。というのも、ドイツでは、旧来の親ナチ勢力であるフランケン・グループの勢力が失われるのを非常に憂慮していたし、また、北アフリカ戦線での苦戦から、ジブラルタルの重要性を明確に認識していたからである。したがって、一時ドイツ政府では、人望のある「青の師団」の司令官ムニョス・グランデス將軍を煽動して反フランコ・クーデタを起こさせる計画さえ練られていた。<sup>(140)</sup>しかしこの計画はその後白紙に戻された。というのも、連合国がアフリカに上陸する危険は大きくないと判断されたからであり、また、

そもそもスペイン占領のために投入し得る軍隊が不足していたからである。

その後一月初めに連合国側はモロッコとアルジェリアに上陸を果たし、ドイツ側を慄然とさせた。その際連合国側は、現地のフランス軍の抵抗をほとんど受けることがなかった。同時にイギリスはエジプトで攻勢を仕掛け、ロンメル麾下のアフリカ軍団を徐々に押し戻すことに成功していた。枢軸軍は北アフリカで挟撃される始末となった。東部戦線にも変化が現れた。一一月末に第六軍団がスターリングラードで包囲された。伸びきった戦線を考慮し、ヒトラーは、多くの戦力を消耗するであろうスペインへの進軍を断念した。このヒトラーの決定を変えることはムソリーニにも出来なかつた。日本も同様にジブラルタル奪取をドイツ帝国に要請したが無駄であつた。<sup>(地)</sup>日本・イタリア両同盟国はまた、地中海での立場を強化するため、ヒトラーにソ連との単独和平を締結するよう絶望的な働きかけを行ったが、ヒトラーはそれをも無視した。<sup>(地)</sup>しかしフランコはなお英米と枢軸諸国の和解に期待をつないでいた。

## 五 フィリピン問題

東京とスペイン政府との間では、このころ、単に戦略的な構想において大きな差異が出てきたのみならず、二国間関係においても緊張が生じていた。日本は太平洋戦争の勃発直後にフィリピンを征服していた。すでに戦争初期の数週間に見られたフィリピンでの日本軍の残虐行為はスペインで激しい怒りを引き起こし、ある程度アメリカ合衆国の側への同情をもたらししていた。スペイン駐在アメリカ合衆国大使は本国政府に次のような報告を送っている。「マニラが非武装都市を宣言したのに日本が野蛮な攻撃を加えたので、スペインでは激しい怒りが巻き起こっている。なぜなら多くのカトリック市民が不法に殺戮され、さらにスペイン人・フィリピン人およびアメリカ人により丁寧に保存されてきたスペイン時代の歴史遺産が破壊されたためである。しかしながら、サント・トーマス大

学のような施設が損害を受けたといった若干のニュースが流されたものの、報道機関は不快感を表明してはいない<sup>(13)</sup>。日本はこうしたスペイン側の告発をアメリカの宣伝として次のように拒絶した。「日本軍はマニラが非武装都市として宣言されたという報告は受けておらず、逆にアメリカ軍が市内に立てこもっている。学校・教会・病院などではなく、純粹に軍事的な標的だけが攻撃されているにすぎない。日本軍は決して牧師・修道女その他の民間人に理由もなく発砲してはいない<sup>(14)</sup>」。須磨はこの電報の内容をすぐにセラノ・スニエール外相に伝え、スペイン語訳を手交した<sup>(15)</sup>。しばらくしてフランクは、「フィリピンが文化的にも歴史的にもスペインの流れをくんでいることを日本が完全に尊重するであろうと確信している」と須磨に直接語った。この会談でフランクは日本の軍事的成果に上機嫌で、シンガポールも間もなく陥落するであろうとの見通しを語った<sup>(16)</sup>。四日後にセラノ・スニエールは須磨と会談し、日本が白人全員をフィリピンから追放する決定をしたとの報道に驚いていると語った。セラノ・スニエールによれば、この報道はスペインでショックを引き起こしたという。須磨はセラノ・スニエール外相をなだめようとしたが、うまくはいかなかったようである<sup>(17)</sup>。一週間後に須磨は、フィリピン問題が親日政策を採っているセラノ・スニエールの立場を悪くしていると報告している<sup>(18)</sup>。

こうした経過の中でスペイン政府をとくに不安にしたのは、マニラ駐在スペイン総領事とのコンタクトが取れず、そのためスペイン国籍を持つ人々の安否が不明のままであるという事実であった。一九四二年二月に日本側はやや譲歩し、須磨を通じてスペイン外務省に次のような通知を行った。「フィリピンではなお軍事作戦が展開されているが、日本は、東京駐在スペイン公使館とマニラ駐在スペイン総領事との間での連絡文書を伝達するためスペインに軍用機の便益を提供するなど、特例的な努力を行っている。同時にフィリピンの日本軍は、フィリピン在住スペイン人の保護のため、出来るだけの手段を講じている。付け加えて言えば、日本は第三国の官吏が占領地域で活動することを禁じているが、この点でも日本はスペインについて非常に友好的な態度をとり、スペイン総領事に

マニラ滞在を認めるなど特別の措置を採っている。もちろん日本はフィリピン駐在スペイン総領事に、以前とまったく同様の特権と地位の全てを行使してもよいとしているわけではないが、実際上はスペイン系市民の利益を保護することを黙認している。この事実は他国には厳秘とされたい。<sup>(19)</sup>

こうした事態に対するスペインの反応は複雑であった。なぜなら、スペインは、一八九八年にアメリカに譲渡した旧植民地フィリピンに今もなお強く文化的な絆を感じており、また、経済的な権益をも有していたからである。日本は、フィリピンにおける重層的な西洋文化の影響を押し戻し、フィリピン人にアジア人としての意識を押しつけようとした。<sup>(20)</sup> 日本語とタガログ語のみが公用語として許容された。したがって、占領政策はたんに英語に向けられただけではなく、スペイン語の使用もまた禁止されたのである。<sup>(21)</sup>

一九四二年九月に須磨は、スペインの文化諸団体が日本の占領政策に抗議を行ったことに関し報告を送った。これに対する日本外務省の返答は次のごときものであった。すなわち、フィリピンは帝国陸軍の行政下に置かれており、また、もともと陸軍が公用語問題で何らかの決定を行うのはやむを得ないことであった。しかし実際には英語とスペイン語の使用は黙認されるであろう、と。ちなみに、日本外務省によれば、スペイン政府はそもそも日本にあれこれ指示を与えるような立場にはないのであった。<sup>(22)</sup>

スペインはこの回答では満足しなかった。しかも、その間フィリピンにおけるカトリック教会の活動が制限され、スペイン人の経済的権益も侵されていたのである。一〇月末、スペイン政府の抗議書が須磨に手交されたが、その語調の厳しさは須磨をして非常に驚かせるものであった。消沈しつつ須磨は、セラノの時代は終焉し、日本はスペインの支援を失う可能性があるかと認識した。そうすれば、とりわけ諜報活動も中止せざるを得ないであろうと須磨は伝えた。<sup>(23)</sup> バチカンもまた、何よりもカトリック教区学校の閉鎖に対し、東京で抗議を行った。この問題は、のちに妥協が成立した。<sup>(24)</sup>

この間、フィリピン人およびスペイン人に対する日本兵の無法行為が人々の感情を逆なでしていた。スペイン政府はついにスペイン市民の本国への送還を要求した。日本は、そうした措置は不可避免的にセンセーションを惹起するとしてこれを拒否した。次の争点はスペイン人所有の会社の接収、およびスペイン企業・カトリック修道会の利益を損なう私経済への介入であった。<sup>(15)</sup>日本の外務省はスペイン政府の抗議に返答し、多くのケースではすでに返還ないし損害賠償が行われているが、アメリカ人女性を妻に持つスペイン人のケース、スペイン・アメリカ共同所有の企業のケース、および親米的スペイン人所有の企業のケースなどはなお問題があると述べた。<sup>(16)</sup>

## 六 フランコの和平仲介努力

一九四二年の半ばに須磨は、セラノ・スニエールの極秘のイタリア訪問について報告している。その背後には、ヨーロッパで和平を仲介しようというフランコの意図が存在しているとも思われた。別の噂によれば、スペインには枢軸側に立って参戦する計画があり、あらかじめ北アフリカにおける要求を提出するつもりらしいと須磨は続けた。<sup>(17)</sup>セラノ・スニエールは六月二十九日に帰国し、七月二日、須磨と長い会談を行った。その時のセラノの言によれば、イタリアでの会談ではスペイン・イタリア二国間関係および一般的世界情勢が話題となった。セラノ・スニエールは、ローマでは和平交渉の噂などについては聞いたこともないと主張したが、しかし将来フランコが和平仲介を行う可能性について全面的に否定したわけでもなかった。セラノ・スニエールによれば、むしろ、スエズが陥落すればスペインはただちにジブラルタル攻撃を計画すべきだというのがフランコの考えであり、また彼自身の考えでもあった。セラノ・スニエールはこの計画をイタリア外相チャーノにも伝えたという。<sup>(18)</sup>イタリア駐在日本大使堀切善兵衛もまたセラノ・スニエールのイタリア訪問をめぐる様々な思惑を伝えていた。なにしろセラノ・スニエールは、バチカンでも会談を行っていたからであった。<sup>(19)</sup>

須磨の電報は、日本が当時ヨーロッパでの単独和平があり得ると考えており、しかもそれを非常に恐れていたこと、さらにまた日本がスペインの態度に大きな不信感を抱いていたことを示している。須磨は日本外務省に対し、セラノのローマ訪問に関する秘密めかした言動が尋常でないことを強調し、さらに、今回のローマ訪問はイタリアをそそのかして単独和平へ導こうとするローズヴェルトの要求に基づいて実現されたとする噂を電報で取り上げ<sup>(10)</sup>た。約一週間後、須磨はスペイン駐在イタリア大使とも会談し、セラノのローマ訪問に関連して、何らかの単独和平が検討されているのかどうか尋ねた。イタリア大使は、自身がローマでの会談にずっと同席していたことを告げ、会談の際に和平の問題が話題となったことはない<sup>(10)</sup>と答えた。ただイタリア大使は、まもなくチャーノがスペインを訪問する予定であることを須磨に伝えた。

一九四二年一〇月初めに須磨は、スペイン新外相ホルダナがイギリス駐在スペイン大使アルバ公宛に発したといわれる電報の写しを日本外務省に転送した。須磨はベラスコを通じてこの文書を手手したのであった。ベラスコはいしセラノがまだスペイン外務省内に同調者を維持していたのは確かである。この文書によればホルダナ外相は、イギリス駐在アメリカ大使を通じてローズヴェルト大統領に和平締結を働きかけるようアルバ公に指示したのである。その訓令によれば、アルバ公は、概略次のようなスペインの立場を強調することになっていた。「スペインは独立と国家統一の立場を維持する。しかしながら反共産主義はスペインの政治的基盤をなしており、スペイン内戦は共産主義を絶滅するために闘われたのであるから、内戦において我々を援助し、最終的に勝利をもたらしてくれた枢軸諸国との友好関係をスペインは決して放棄することは出来ない」。さらにホルダナは次のような見解を開陳する。「交戦諸国はお互いに相手を軍事的に絶滅することは出来ないし、またそれを希望するはずもない。なぜなら、そのようなことになれば、世界の経済的再建は不可能となるからである」。それゆえホルダナは、もし時期が熟してくれば、この「兄弟間の戦争」をスペインが仲介する用意があると提案するのである。須磨は、バチ



カンにおけるローズヴェルトの個人的使者マイロン・テイラーが最近スペインを訪問したことと関連させながら、このホルダナの和平提案を報告したのである。<sup>(10)</sup>

テイラーはマドリードで特にホルダナ外相と会談した。須磨の収集した噂によれば、その会談では、スペインによる仲介の可能性を含め、ヨーロッパにおける和平の締結が話題となった。テイラーはフランコと秘密の会談をしたとさえいわれた。<sup>(11)</sup> ペラスコは須磨公使にホルダナとテイラーの会談の内容といわれるものを伝えた。その際テイラーはいくつかの提案をしたとされるが、実際はテイラーが提案したわけではなく、むしろスペイン政府の願望に発するものだったようである。しかしその内容は須磨と日本外務省を驚愕せしめるに十分であった。ペラスコの情報によればテイラーは、英米および英独の間で和平を締結し、ヨーロッパの「兄弟間の戦争」を終結させる機が熟しているとして、つぎのように主張した。「スペイン政府はヒトラーにこうした提案を持ち込むのにふさわしい最良の立場にある。しかし日本は分離して扱わなければならない。たしかに英米連合国はかならずしも日本に過酷な条件を無理矢理のませようと決意しているわけではないが、しかしアジアに対する日本の支配はあまりに強力である。もしアメリカ合衆国とイギリスがドイツと和平を締結すれば、英米の圧力は日本との戦いに振り向けることが出来よう」。これに対しホルダナは、ドイツはそうした条件では和平に応じることはないだろうと答えた<sup>(12)</sup>とされる。

こうした確実に誤りを含んだ情報は、日本政府を驚愕させて和平を模索させるために、つまり単独和平論で日本政府を牽制しつつ戦争終結へと動かし、日本を全面和平に誘い込むために、意図的にリークされた可能性もある。いずれにせよ須磨の電報からは、ホルダナが須磨に呼びかけを行ったのは和平仲介の機会を探るためであったことが明らかである。しかし翌月の一九四二年一月、連合軍は北アフリカに上陸した。スペインの立場はこれによりドラスティックに変化した。連合国は今や勝利を確信し、いかなる場合でもドイツとの和平について交渉しなくなつたからである。<sup>(13)</sup> ただ、それでも日本に対するスペインの態度は急には変化しなかつた。一九四三年一月初めの新

年挨拶でフランコは、須磨に対し内密に日本兵の忍耐力を賞賛し、もし日本がそのやり方で戦えば蒋介石政権を打倒するのは容易であろうとの確信を述べた。そのうえフランコはカルカッタ爆撃の成功に祝意を述べた。<sup>(16)</sup> さらにスペイン人諜報員はアメリカ合衆国へ入国し、ワシントン駐在スペイン大使館を通じて依然として日本のための諜報活動を推進していたのであった。<sup>(17)</sup>

北アフリカでの枢軸側の苦境、連合国側の「無条件降伏」要求、スターリンググラードでのドイツ軍の壊滅的敗北、戦争に巻き込まれることへのスペインの恐怖。こうした諸要因が一九四三年初頭のフランコによる和平工作の動機であった。フランコの基本的な関心は、非ヨーロッパ列強、すなわちアメリカ合衆国、ソ連、日本をヨーロッパから締め出し、これら諸国のヨーロッパにおける影響力を制限することであった。このため彼はドイツ政府とイギリス政府に<sup>(18)</sup>単独和平の締結を迫り、自ら仲介役を申し出た。これは、イギリスをアメリカから分離し、差し迫るヨーロッパのボルシェヴィキ化への危険を持ち出せば、ドイツとイギリスに圧力を行使し得るかも知れないという<sup>(19)</sup>はかない希望に基づくものであった。

スペイン外相ホルダナとスペイン駐在イギリス大使ホーアの会談では、和平工作は日本を犠牲にしても実現される予定であることが明確となった。日本はソ連と同程度の扱いを受けた。ホルダナによれば、ソ連および共産主義に対する防波堤としてヨーロッパの統一を実現し、また、同様の理由から、アジアにおけるヨーロッパの権益を回復することがスペインの希望であるとされた。その際に経済的権益のみが問題なのではなく、そうしたアジア諸国において白人、とりわけスペイン国民がかつて行ってきた文化的・文明的活動をも視野に入れていくのであった。ホルダナはここでキリスト教信仰の伝播を念頭に置いていたのであるが、キリスト教信仰は日本の勝利によっても、また中国ないしロシアの勝利によっても根絶されてしまうであろうと考えられたのである。<sup>(20)</sup>

しかしイギリスはこの工作に何らの関心をも示さず、また、ドイツ外相リッペントロップもあらゆる和平活動を

きつぱりと拒否した。リッベントロップは、和平工作はもつぱらドイツ帝国の弱点と見なされると主張した<sup>(17)</sup>。しかもドイツ政府は、同盟国である日本からまったく逆の提案を受けていた。すなわち対ソ戦線に於いて新しい攻勢をかけるよりも、逆に大規模な軍力を用いてスペインに侵攻し、ジブラルタルを、さらには北アフリカを征服せよというのであった。ヒトラーはこの日本の提案を拒否した。というのも、対ソ戦争はヒトラーにとつて最優先の課題であるのみならず、そもそもドイツはスペインに侵攻しうる十分な軍隊を有していないからであった。この日本の提案は、一九四三年四月に東京の参謀本部によつて実施されたヨーロッパの戦争状態に関する二日間の図上演習に基づくものであり、その結果は日本駐在ドイツ陸軍武官アルフレート・クレツチュマーに伝えられていたのである<sup>(18)</sup>。この日本の提案は一九四三年四月一八日、日本人将校達との会談の中でヨードル將軍により拒否され、さらに四月一八日にカイテル將軍を伴つて大島大使と会談したヒトラーによつても拒否された。この会談の記録はドイツでも日本でも消失してしまつてゐるが、そのほんの一部がアメリカ合衆国によつて傍受されてゐた<sup>(19)</sup>。重光外務大臣はあらためて大島大使に提案を繰り返すよう指示したが、そこからは、ヒトラーが日本の提案を断固として拒否し、むしろ対ソ戦線でもう一度攻撃を仕掛けるという強い希望を表明したことが分かる。重光の訓令によれば、大島は「対ソ攻撃の代わりにジブラルタルとチュニスに」矛先を転換するよう主張すべきとされてゐたのである<sup>(20)</sup>。

一九四三年三月には、ベラスコ情報に基づき、ローマにおけるセラノ・スニエール元スペイン外相の和平提案の模様を伝える須磨の注目すべき数通の報告が日本に発せられてゐる。それによれば、セラノ・スニエールはローマで、和平締結の可能性に関し、リッベントロップ(ドイツ外相)、チャーノ(元イタリア外相、一九四三年二月よりバチカン駐在イタリア大使)およびあるアメリカ人と共に二日間の会談を行ったという。このアメリカ人の名前は挙げられていないが、須磨はそれをスペルマン枢機卿ではないかと推測してゐる。その場では和平の必要性については一致が見られたが、その条件では見解は別れた。たとえばリッベントロップは連合国側に北アフリカの

支配権を譲り渡すことを拒否し、そのうえ、日本を孤立させ、日本からアジアの支配権を剥奪することに難色を示したといわれる。ベラスコはセラノ・スニエールの言葉として、ペイヒベデル大佐が経済交渉の名目でアメリカ合衆国に派遣されたが、実際はローマ会談から関心を逸らすための陽動作戦であると伝えた。<sup>(16)</sup>ペイヒベデルはスペインの外務大臣を勤めたことがあり、親英的な態度で知られていた。アメリカ合衆国に傍受された須磨の電報では、このペイヒベデルのことが詳細に報告されている。セラノが須磨に語ったところによれば、ペイヒベデルは現在スペイン領モロッコ総督であり、北アフリカ問題解決についての交渉のためにアメリカ合衆国に送られたという。ホルダナ外相はペイヒベデルのアメリカ訪問を新型兵器と弾薬工場の見学のためだと説明した。<sup>(17)</sup>須磨は情報源がベラスコであることを隠すため、セラノ・スニエールにはそれ以外の問題について慎重に聞き出す以外のことは出来なかったが、それでも和平問題を含む全貌が確認されたと報告した。<sup>(18)</sup>須磨がこの問題で東京に送った電報は、これ以外にも三通あったようだが、残念ながら残されていない。イタリアおよびドイツに駐在する日本大使館、およびバチカン駐在日本公使館では、須磨の報告に疑いのまなざしが向けられた。イタリア外務省に照会してみると、思いがけずも、屈託のない笑いが巻き起こった。そもそもセラノ・スニエールはローマにはいなかった。いたのはリップベントロップだけであったというのである。リップベントロップも大島の照会に答え、かつてそのような会談が行われたことはない<sup>(19)</sup>と論駁した。大島は明らかにベラスコの氏素性を知らなかったが、この「諜報組織の長」およびそのセラノ・スニエールとの関係に関し、大島は批判的な疑問を呈したのであった。そのうえで大島は、いわゆる和平交渉に関してセラノ・スニエールを激しく攻撃した。<sup>(20)</sup>というのも、須磨が断言したように、セラノ・スニエールはベラスコの言っていることが正確であると確認し、ベラスコを通じて自分の旅行経過の詳細についても報告していたからである。<sup>(21)</sup>須磨によれば、セラノのローマ訪問は外相ホルダナにさえ知らされず、ただフランコのみ<sup>(22)</sup>に通知されていたとされる。

この混乱・錯綜した事態の背景はよく分らない。ベラスコかセラノ・スニエールのどちらかが、あるいは二人が口裏を合わせて、偽情報で日本をそそのかし、自ら和平交渉を開始し、明らかにフランコが念頭に置いていたようなヨーロッパに限定された和平交渉を阻止することを狙ったのかも知れない。しかし、真実の情報と幻想の見分けがつかないベラスコが、日本人の役にたつどころか、日本をもう一度惑わし、日本人の間に不和をもたらそうとしたというのが実状であろう。

チュニジアにおける枢軸側の降伏(一九四三年五月)、連合軍のシチリア上陸(一九四三年七月)、およびほぼ同時期の対ソ戦線におけるドイツ側攻勢の挫折ののち、ドイツ国防軍の破局がほぼ不可避と思われるようになる、フランコは、かつての戦略を変更し、アメリカ合衆国を和平のプロセスに引き入れようとした。彼はその際、一九四三年七月にスペイン駐在アメリカ合衆国大使ハイエスに対して述べたように、彼独自の「複数戦争論」をふたたび持ち出した。つまり彼は再度、単一の世界戦争の存在を否定したのである。しかし彼は、以前の「二つの個別戦争論」ではなく、「三つの個別戦争論」を主張することにより、自分の見解をより緻密化した。第一の戦争、つまり西欧連合国と枢軸国の戦争では、スペインは中立である。いや、英米に対して好意的中立の立場を採ってさえいる。第二の戦争、つまりドイツとソ連の戦争では、スペインは無関心ではいられない。ソ連が勝利する場合には全ヨーロッパは共産主義に支配されるだろうからである。第三の戦争、つまり太平洋戦争では、日本は打倒されなければならない。

フランコによれば、日本人はヨーロッパ文明によっても何らその表層を傷つけられてはいない。彼らは基本的に蛮族である。彼らは最悪の帝国主義者であり、中国および極東全域の支配をもくろんでいる。フィリピンに独立を保証するという彼らの最近の約束はまったく信用出来ない。スペインは日本に何らのシンパシーも抱いておらず、もし軍事的に弱体でなければ太平洋戦争において喜んでアメリカと協力したいところである。以上のようなフラン

この和平提案に対しては、しかし、アメリカ合衆国は何らの関心をも示すことがなかった。

## 七 日本とスペインの断交

日本の運勢は下り坂であったが、前外相セラノはなお須磨とのコンタクトを維持していた。一九四一年当時、日本とスペインはその外交代表部を大使館に昇格させる計画であった。スペインはすぐに準備を整えたが、しかし日本はこの計画を取り下げた。このことは日本およびセラノ・スニエールの対日友好政策に対する激しい憤激と批判を呼び起こした。<sup>(18)</sup>一九四三年一月、つまり彼の解任の数カ月後に、セラノは両国の公使館を大使館に格上げするようふたたび提案した。<sup>(19)</sup>須磨はこれを公式の申し出と見なし、賛成のコメントをつけて伝送した。四月に日本の外務省は、天皇の同意を条件にこの提案に賛成した。<sup>(20)</sup>しかしスペイン政府からは、まったく予期せぬことに、拒否の回答が寄せられた。この拒否回答は、この間天皇が手続を裁可していただけに、いっそう都合が悪いものであった。

重光新外相は全力を尽くしてスペインの賛成を得るよう須磨に指示した。<sup>(21)</sup>結局ホルダナは、フィリピン問題に関するスペイン政府の苦情の諸原因を日本が除去すべきである、という前提条件を提示した。<sup>(22)</sup>重光はこの訴えの正当性を部分的に認め、個々の事例に則して救済を約束したが、同時に、外務省が軍部に対して自己の主張を貫徹するのは容易ではないことをも示唆した。<sup>(23)</sup>にもかかわらずスペインは、なによりも外交要員をこれ以上日本に派遣する現実的な可能性が存在しないという理由をつけて、懇懇な言葉ではあったが、戦争が続いている限り大使館を設立出来ない<sup>(24)</sup>と回答した。

その後一九四三年九月にイタリアが降伏すると、フランコは、スペインの中立政策、すなわち「非交戦」政策の放棄を公けに宣言した。彼はイタリアのバドリオ政権を承認し、枢軸国の国民には以後スペイン本土とタンジール

およびスペイン領モロッコの間、の航空路を使用させないと約束した。これは日本の諜報員にも該当するものであった。なお、水路の制海権はどのみち連合国側が握っていた。そのうえフランスは、対ソ戦線から「青の師団」を撤退せよという連合国側の要求をも受け入れた。反連合国プロバガンダも同様に大幅に緩和されたので、未解決の問題は、スペイン本土における枢軸側諜報員の問題と、軍事物資のドイツへの供給に関する問題のみとなった。

日本もまたすでに長いこと守勢に追い込まれていた。動揺する帝国を安定させるため、日本は、占領地域のいくつかで形式的に独立政府を設置した。これらの政府は実際には日本政府の意のままに繰られていたのだが、フィリピンでも同様であった。フィリピンのラウレル政権は日本の同盟国ないし傀儡国家にのみ外交的な承認を受けたにすぎなかった。

フィリピンとバチカンおよびスペインとの間には文化的・宗教的な絆が存在していることから、日本政府は、フィリピン・バチカン外交関係およびフィリピン・スペイン外交関係の樹立にとくに努力した。<sup>(19)</sup> 独立宣言の日(一九四三年一〇月一四日)に須磨は、外務省の指示により、フィリピンを公式に承認してほしいという希望をホルダナに伝えた。須磨はフィリピンに対するスペインの伝統的な関係および経済的な権益の存在を指摘し、さらに、苦情の原因となっている幾つかの問題について善処する旨を約束した。これに対しホルダナは、スペイン政府は原則的に新国家の承認を戦争終結まで留保するつもりであると回答したが、この原則の例外もあり得ると示唆した。ともあれ彼は検討すると約束した。<sup>(20)</sup>

日本政府への公式の回答文は現存の史料の中には見当たらない。しかし四日後、スペイン外務省はフィリピンのラウレル政権に対し、フランスおよびスペイン国民の名において「独立」の祝電を送り、両国の旧来からの関係を強調している。この祝電はたんに下級官僚の独断専行の現れにすぎないのか、あるいはスペイン政府がこの行為により正式の外交的承認という一層大きな悪を避けたかったのか、当時もあれこれと憶測が飛び交った。ホルダナと

須磨との会談を考えれば、後者の方が真実に近いであろう。<sup>(19)</sup>この方法によりスペイン政府は、フィリピンに残存するスペインの影響力および在留スペイン市民の保護を犠牲にしなくても済んだのである。

さてアメリカ合衆国では、この「事実上の承認」に対する憤激の嵐が巻き起こった。スペインは「事実上の承認」なる主張を否定し、祝電を純粋な儀礼的行動として——つまりラウレルの電報への返答として——その重要性を否定しようと努めた。<sup>(20)</sup>この問題を考える際には、米西関係の中で「フィリピン」というテーマがとりわけ微妙な問題であるという事実を忘れてはならないだろう。なぜなら、一八九八年の米西戦争のちアメリカ合衆国はフィリピンを併合し、アジアおよびアメリカにおけるすべてのスペイン植民地帝国の終焉をもたらしたからである。スペインはこの敗北を「国家的悲劇」と受け止め、その傷はなおけつして癒えてはいなかったのである。

スペインはこの時期、すでに日本に対し距離を置き始めていたのであるから、「ラウレル政権の承認」については、外務省の役人が勝手に行ったというのが真実に近いであろう。一九四三年一月に重光外相が須磨公使に送った電報を読むと、日本政府もスペイン政府が距離を置いていることに気付いていたことが分かる。この電報の中で重光は、スイス政府とはまったく逆に、例えばアメリカの収容所での日系人の虐待について、スペイン政府はアメリカ合衆国に対し日本の利益を代表するという義務をほとんど、あるいはまったく果たしていないと苦情を呈していたのである。<sup>(21)</sup>須磨はセラノ・スニェール退任後のスペイン外交政策の変化からこのスペイン政府の態度を説明したが、日本の利益を代表する権限をスペイン政府から剥奪し、すべてをスイス政府に任せるという考えには反対し、概略つぎのように述べた。「もし日本の利益代表権をスペインから剥奪すれば、スペイン政府は動揺し、スペイン駐在の日本公使館とスペイン外務省との間で維持されていた関係は凍結されるであろう。そうになると、以前とは異なり、もはや情報を得ることは出来なくなるであろうし、日本はもはや、ラテンアメリカ諸国に駐在するスペイン代表部に対する政治的・社会的影響力を行使することも出来なくなるであろう。たとえば日本の利益を代表する



ためにスペイン領事としてバンクーバーに派遣されていたコッペ・チンチージャに対し、日本は「特別のコンタクト」を享受していたではないか。もしスペイン政府からこの任務を奪い、それをスイス政府に譲り渡すならば、コッペが事務所を閉鎖し、日本の情報活動が打撃を受ける危険が生じよう<sup>(18)</sup>。重光はこの意見に賛成し、「秘密の資金」を使ってスペイン人諜報員に金品を渡し、それによって彼らをもっと効率的に働かせるよう提案した<sup>(19)</sup>。

この時期、コッペはまだ逮捕されてはいなかったが、その正体がばれていたことに須磨はまだ気付いてはいなかった。スペインとアメリカ合衆国の関係は、いずれにせよ「ラウレル政権承認」問題で非常に悪化していたのであった。

英米諸国はこうしたフランコの惨めな守勢的立場を利用し、強気の要求を提示した。しばらくあと、バンクーバーにおいてコッペのスパイ容疑事件が発覚したが、この事件は好都合な告発理由をさらに提供した。アメリカ合衆国はスペインに不可欠の石油その他の物資の供給を停止した。供給再開のための交渉は一九四四年四月末まで遷延し、スペインは大きな犠牲を払った。つまり、スペインは、ドイツへのタンングステンの供給を大幅に制限し、タンジール駐在ドイツ総領事館を閉鎖し、枢軸側のスパイを国外追放することを約束させられたのである<sup>(20)</sup>。枢軸側の諜報活動に対する処置には日本の活動も含まれた。スペイン政府はタンジールにおける日本の諜報活動の停止を要求し、最後まで残っていた「はせべ」という名の諜報員の退去を求めた。日本は最初抵抗したが、一九四四年五月にしぶしぶ譲歩した<sup>(21)</sup>。

一九四四年七月の英米によるノルマンディー上陸後、連合国側の諜報員はマドリッドでベラスコを拘束した。ベラスコが連合国側のために二重スパイとして働くことを拒否すると、連合国の諜報員は、もし諜報活動を停止しなければ殺すとベラスコを脅した。このためベラスコはドイツに逃れ、それにともない彼の諜報組織も消滅した<sup>(22)</sup>。

須磨はベラスコの諜報組織の活動停止を、状況が改善されるまでの「暫定的な」措置と主張した。一九四五年二

月になつても須磨は、ベラスコの代わりとして、スペイン外務省情報局長リアルプおよびあるアメリカ合衆国駐在新聞特派員をそのかして情報を提供させようとしたのみならず、フランスの外交官にまで同様の働きかけを行つていた。須磨はこうした三人の人物の全員から同意を得たと述べている。しかし須磨はその資金として、次年度分に五〇万円にもおぼる額の予算を外務省に要求している。将来戦況の悪化にともなつて送金が増えます困難になるうから、資金は可及的速やかに、かつ一度にまとめて送金して欲しいと須磨は述べた<sup>(20)</sup>。ただ、須磨がこの資金を受け取つたかどうかは確認されていない。

一九四五年三月の終わりにベラスコは、ベルリン駐在日本大使館に日本旅券の発効を申請し、スイスに出国出来るよう依頼した。もしそれが不可能であれば、スイス国境までの出張でもよいとのことであつた。大島大使は、すでに他の多くの人物にもスイスへの移転を指示していたが、それまでスイスの入国ビザが発給されていなかったから、今回のベラスコの入国も非常に困難であろうと考えた<sup>(20)</sup>。しかし須磨は、スイスのフリブル市の修道院にベラスコの叔父が住んでいることを指摘した。須磨は、この叔父が国境まで来てベラスコと面会し、何らかの方法でベラスコの入国を可能にするようにしたらどうかと提案した。須磨は大島に、ベラスコを援助するために、考えられるすべてのことを実行して欲しいと依頼した。須磨は、そのための資金を引き受け、必要な金額をあらかじめ送金するとまで約束した<sup>(20)</sup>。

ベラスコは本稿の筆者(クレープス)の質問に答え、たしかに大島から「医学博士アンヘル・ドニャーテ・レカ」という名宛ての日本旅券をもらったと述べた。彼はまた、叔父がフリブルでマリア信心会の修道士であつたことも明言した<sup>(20)</sup>。須磨の電報の数日後、大島は大使館書記官佐藤ほか一名がフォーアールベルクの国境の町フェルトキルヒに旅行すると告げた<sup>(20)</sup>。その「ほか一名」がベラスコであつた<sup>(20)</sup>。ベラスコの言明によれば、その時佐藤はベラスコをスイスに入国させることが出来ず、日本大使館は国家保安本部のシェーレンベルクに援助を求めたとい

う。そこで国家保安本部は、やはり「医学博士アンヘル・ドニャーテ・レカ」という名のドイツ旅券を発行したと(20)いう。ベラスコは長いこと待たされたあと、ようやく入国に成功した。ベラスコの貢献を高く評価した須磨は、一九四五年四月一日、すなわちスペインが対日国交を断絶する前日に、ベラスコに将来のため援助を与えるよう日本外務省に提案している。スペイン駐在日本公使館はスイスに一定額の資金を確保していたが、それをベラスコに生活資金として与えるべきであると主張した。須磨によれば、戦後ベラスコに報奨金を支払うのが適当であろうとされ、ベラスコ自身もそれを望んでいたという。加えて、マドリードに残るベラスコの家族を援助し、少なくとも一年間の生活費を支給すべきだとされた。須磨は「東」機関の活動を終了を宣言したが、マドリードに集められた資料類はスペイン人協力者の手によってポルトガル駐在日本公使館に移送したいとの希望を表明した。(20)その後ベラスコはスイスの収容所で終戦を迎え、のちに連合国の代理人によって尋問されることとなる。(20)

スペイン政府は一九四四年の諜報活動の終焉によって安堵の胸をなでおろしたかもしれない。なぜなら諜報員の活動は、当時新たに採用されていた政策の障害となっていたからである。他方、フィリピンでの様々な出来事をきっかけとして、対日関係はさらに悪化した。一九四四年一〇月以来スペイン政府は、フィリピンにおけるスペイン企業の没収、あるいはフィリピン在住スペイン人からヨーロッパにいる家族への送金の禁止などに対し、再三抗議した。スペイン政府は、外国における日本の利益の外交的保護を停止すると迫った。須磨の見解によれば、スペイン政府は、面子を失うことなくアメリカの要求に応ずるための口実を探し求めていたのである。(21)

しかし外交関係の断絶を出来るだけ回避するため、重光外相はマニラに訓令を發し、スペイン人の権利と財産を可及的に保護するよう求めた。(21)重光はスペイン政府に対し、まもなく強制措置を撤回すると約束し、損害賠償を申し出た。(21)しかしそれにより和解が成立した訳ではなく、逆に、スペインの政治家たちの発言が揺れ始めたことを示していた。スペインのレケリカ外務大臣はAP通信とのインタビューで、フィリピンでのキリスト教的・ヨーロッパ

パ的文化の存続を期待すると述べていたが、そうした立場から彼は一月二五日、須磨公使にフィリピンの事態に対する説明を求めていた。須磨の判断によれば、これによりスペイン政府は、フィリピンにおける日本の文化的諸活動に抗議したのであった。そのうえレケリカ外相は有力誌『ムンド』において、アメリカの庇護の下に形成されたオスメーニャ政府がフィリピンの正統政府であると述べていた。一方こうした発言に対する須磨の照会にレケリカは、ただフィリピンにおける既存の文化の存続に関心を持つていただけであり、また『ムンド』での発言はフィリピン政府を承認するか否かを意味するわけではないと答えたのであった。<sup>(24)</sup>

重光外相の考えでは、スペインを通じて日本の利益を代表する必要があるとあり、情報活動基地としてのスペインの価値も高く、さらにスペインが敵陣営に寝返るのを阻止する必要もあった。こうした観点から重光は、日本政府はスペイン政府との国交断絶を避けるため努力しなければならないと須磨に伝えた。しかしながら、オスメーニャ政権の承認はラウレル政権の承認に関するスペイン政府の従来態度とは矛盾し、それが日本に対する非友好的な行動であるという事実には変わりなかった。須磨はこうした見解をスペイン政府に伝えよと訓令された。<sup>(25)</sup> しかしながら、国交断絶を回避するには、この時点ではあまりに遅すぎた。一九四五年一月から二月にかけてのマニラ防衛戦における日本軍の常軌を逸した残虐行為により、両国関係の緊張は頂点に達した。一般市民への残虐行為が行われ、スペイン人だけで二〇〇人が死亡し、領事館が襲撃された。さらに旧市街全体が破壊されたのである。<sup>(26)</sup> スペインでは憤激が拡がった。こうした事態は、国交断絶のための格好の口実をスペイン政府に与えた。この事件の財政的補償をめぐる交渉の中で、日本側も、スペインが断交を欲しているとの印象を抱いた。つまりこの交渉でスペイン側は、須磨をして「天文学的」数字と言わしめる程の額を日本側に要求したのである。この問題は戦後一〇年たつてようやく解決した。

須磨は三月中旬に、マニラでの破壊と残虐行為に関しスペインで巻き起こった激しい怒りを詳細に報告した。そ

して、かつてドイツ側に立つてソ連と戦った「青の師団」の例にならない、スペイン政府が、フィリピンにおけるカトリック文明の救済のためにアメリカ軍の側に立つて戦うスペイン軍部隊を編成する可能性もあると伝えた。<sup>(20)</sup> 元外相セラノ・スニエールは、自分の観測ではフランコは対日宣戦布告に傾いていると密かに須磨公使に警告した。セラノは、もし自分が何らかの形で日本の役に立つなら、遠慮しないでその旨を伝えてくれと述べた。<sup>(21)</sup> 須磨はまた、長年にわたり枢軸国への強烈なシンパシーを示してきた「青の師団」の元司令官ムニョス・グランデス將軍とも会談しようと試みた。ムニョス・グランデスは、アメリカ合衆国からの政治的圧力にも関わらず、フランコはマニラでの事態を口実に対日宣戦布告することはないだろうとの観測を示した。<sup>(22)</sup> また重光外相は、スペインとの関係悪化が、以前の日本の諜報活動に関する紛糾を招くのではないかと恐れた。そのため重光は、秘密文書の管理には特に注意せよと指示した。<sup>(23)</sup>

確かにスペインの参戦という事態には至らなかったが、なおしばらく不確定な状態が続いた。一九四五年三月二七日にスペインは、日本軍のマニラでの行動を理由に、アメリカ合衆国における日本の利益の外交的保護を停止した。<sup>(24)</sup> 須磨や大島は、こうした状態でもなおドイツがスペインを抑えられるだろうと考えていたが、重光外相はこうした見解には同調しなかった。<sup>(25)</sup> スペインは継続的に抗議を提出しており、<sup>(26)</sup> それらはスペインの次の行動を暗示しているかに見えた。スペイン外務次官カステイロは須磨に数億ドルもの賠償要求を提出し、それが実現されなければ外交関係を断絶するか参戦するとあからさまな脅しをおこなった。<sup>(27)</sup> 二日後の四月一日、須磨は、実際に国交は断絶される予定だとの情報を受け取った。須磨は日本政府に打電し、スペイン駐在日本公使館内部で秘密文書の焼却を開始したと伝え、また、いづれにせよ暗号電報の交信はもはや許可されなくなるであろうから、翌日に暗号書と暗号機を破壊すると伝えた。<sup>(28)</sup>

四月一二日、須磨はスペイン政府による外交関係断絶に関する覚書を受け取ったが、そのとき手交したのはレケ

リカ外務大臣自身ではなく、カステイロ外務次官であった。そこで理由とされたのはやはりマニラでの残虐行為であった。公使館は、暗号のみならず、平文による電報交信さえ午前零時をもって停止された。<sup>(20)</sup>日本政府もこれと同様の措置を東京駐在スペイン公使館および神戸駐在スペイン領事館に対して行った。ただ、奇妙なことに、日本の傀儡政権である「満洲国」および中国の南京政権とスペインの外交関係は継続した。<sup>(20)</sup>そのうえドイツの伝書使が須磨の電文をリスボンまで運んでくれて、リスボン駐在日本公使館がそれを東京に発信したおかげで、須磨は、なお数週間にわたって電報交信を維持することが出来た。<sup>(20)</sup>スペインと国交が断絶したため、八月に東京の降伏受諾をアメリカに伝えたのはスペインではなく、新しい外交的利益保護国であるスウェーデンであった。

戦争終結まで、スペイン在住の日本人および日本在住のスペイン人は、外部との連絡を制限されたが、通常の生活を送った。八月一八日、スペイン政府は対日戦勝利をアメリカ合衆国に祝した。八月二一日、アメリカ駐在スペイン大使カルデナスはわざわざ国務省に出向き、直々に祝意を伝えた。しかしこの時応対に出たのは下っ端の役人で、カルデナスは失望せざるを得なかったのである。<sup>(20)</sup>

## 八 一九四五年以後の日本とスペイン

第二次世界大戦後、日本もスペインも国際社会の孤児となった。日本はアメリカに占領され、日本の政治・軍事指導者達は勝者の法廷に引き出された。西側諸国、とりわけアメリカ合衆国は、フランコの失脚と民主化を達成し得るとの期待から、スペインに圧力を行使した。アメリカは大使を召還し、フランスもこれにない、加えて国境を閉鎖した。国際連合はスペインの加盟申請を拒否した。アメリカ合衆国は一九四八年に至るまで、飢餓の国スペインに対するいかなる経済援助をも拒否した。一九四八年によくアメリカとフランスはスペインとの通常の貿易関係を再開し、翌年大使を派遣した。西欧諸国の中ではイギリスだけがスペインに対し宥和的な態度をとった。

イギリスは、第二次世界大戦中のスペインの外交政策に一貫して肯定的な側面があつたと評価していたのである。一九五〇年代初頭までに、日本にとつてもスペインにとつても情勢は根本的に変化した。一九三〇年代に初めて両国を接近させ、いまでも両国に深く根を張る反共産主義は、冷戦の中で、むしろ歓迎されることになっていった。両国は一定程度名誉を回復され、西欧の国際体制に組み込まれた。両国はアメリカ合衆国から巧妙に譲歩を引き出す術を心得ていた。

日本は一九五一年にサンフランシスコ講和条約により主権を回復した。翌年日本はスペインとの外交関係を、しかも今回は大使レヴェルで、樹立した。講和条約の対価として日本はアメリカ合衆国と安全保障条約、つまり防衛条約を締結し、同盟国アメリカに軍事基地を提供する義務を負った。

スペインは、同じく権威主義的政治体制を有するポルトガルとは異なり、北大西洋条約機構への加盟には成功しなかつたが、一九五三年にまったく類似の協定をアメリカと締結し、軍事・経済援助という報奨を得た。スペインは一九五五年に国連に受け入れられ、翌年に日本が続いた。この間、一九八二年以来スペインは北大西洋条約機構の一員となり、一九八六年以来ヨーロッパ共同体の一員となった。こうして日本とスペインは今日ともに西側経済体制に編入されたのみならず、いわば「一周遅れて」相互に結びついた。

ベラスコと須磨のその後についてなお付言する必要がある。元諜報員Ⅱベラスコはドイツのナチス高官に南アメリカ——主にペロン大統領のアルゼンチン——への逃亡を援助するための工作員として活動した。彼自身の言明によれば、彼はその際、悪名高いナチ党官房長マルティン・ポリアマンをUボートで安全な場所に移したとい<sup>(23)</sup>う。この主張はアメリカ側の文献では必ずしも外的ではないとされている<sup>(24)</sup>。

加えてベラスコは、ファランへ党籍をもつ参謀総長ムニョス・グランデス將軍の下で、將軍が死ぬ一九七〇年まで、スペインの軍事情報部で働いた。東部戦線の「青の師団」の元司令官グランデスと元諜報員Ⅱベラスコは、と

もにフアランへ党内の親ナチス派に属していた。五〇年代にムニョス・グランデスはスペイン政府とアメリカ合衆国政府の緊密な関係の形成に際し指導的な立場で活動した。

こうした外交上の新方針の結果、彼とベラスコはアメリカの秘密情報部CIAとも協力した。<sup>(23)</sup> このためベラスコはアメリカ合衆国により庇護され、元外相セラノとは逆に、彼の名前は解禁された盗聴資料の中でも抹消されたのかもしれない。停年退職後ベラスコはマドリードに暮らし、詩やドラマ、および波瀾に満ちた自分の人生の回想録を記している。

須磨弥吉郎は一九四六年三月にスペイン輸送船の四等席の乗客として日本に到着した。その時アメリカ軍の憲兵が彼に戦争犯罪人として訴追された旨を告げた。しかし訴訟には至らなかった。<sup>(24)</sup> これは、アメリカが、訴追に至れば須磨元公使の諜報活動に関するアメリカ当局所有の情報を公けにしなければならないと恐れたからであろう。須磨はアメリカ占領当局により一九五一年まで公職から追放された。しかしその後まもなく彼は五年間にわたり保守政党的代議士になることが出来た。<sup>(25)</sup> この改進黨の支配の下で日本はアメリカ合衆国と緊密に結びついたのであった。

つまり彼は、ベラスコと同様、最終的に西側陣営へと下った。須磨とベラスコを結びつけたのは、まさしくこの西側陣営に対する闘争だったのである。須磨は、自分のマドリードでの諜報活動のほとんど全てがアメリカに筒抜けであったことを、一九七〇年の死に至るまでついに知ることがなかった。

(134) Carlton J.H. Hayes, *Warime Mission in Spain 1942-1945*, New York 1945, pp. 30-31; 一九四二年六月一日付ヘイズ電報 *Foreign Relations of the United States* (以下: FRUS), 1942, Vol. III, Washington 1961, pp. 290-292.

(135) Hayes, op. cit., p. 71.

(136) フランコも直接須磨に、期待に反しシンガポール陥落後も戦争が終わらなかったと失望を表明している。MS 一九四



二年一〇月二三日付。

- (137) 一九四二年九月五日付須磨電報、外務省九。
- (138) 一九四二年一〇月四日付須磨電報、MS 一九四二年一〇月九日付。
- (139) 一九四二年一〇月一七日及び一〇月二六日付須磨電報、MS 一九四二年一〇月一七日及び一〇月二九日付。
- (140) これについては Ruhl, a.o., S.110-114, 167-174. スラスロが一九四三年一月に須磨に語ったところによれば、ムニョス・グランデスはかつてドイツ側に立って参戦しようフランスに求めたという。スラスロは、古くからのフアランハ党員としてムニョス・グランデスと親しい間柄にあった。一九四三年一月五日付須磨電報、SRDI, p.30.617.
- (141) たとえば、参照、MS 一九四二年一月二六日及び一九四三年四月三〇日付。一九四二年一月一日に行われたリッベントロップ外相と大島大使の会見に関するコッソフリースのメモ、ADAP E IV, Nr.275.
- (142) これについては、参照、Gerhard Krebs, "Japanische Vermittlungsversuche im deutsch-sowjetischen Krieg, 1941-1945", in: Josef Kreiner und Regine Mathias (Hrsg.): *Deutschland-Japan in der Zwischenkriegszeit*, Bonn 1990, S.239-288.
- (143) Tel. no. 1119, Weddell to Secretary of State, Madrid, Dec. 29, 1941, in: NARA, State Department Files, 740.0011. P.W./1459.
- (144) 一九四一年二月二八日付須磨宛東郷電報、SRDI, p.18.466.
- (145) 一九四一年二月二九日付須磨電報、SRDI, p.18.470.
- (146) 一九四二年一月四日付須磨電報、SRDI, p.18.649.
- (147) 一九四二年一月八日付須磨電報、SRDI, p.19.030.
- (148) 一九四二年一月二二日付須磨電報、SRDI, pp.19.620-621.
- (149) 一九四二年一月三日付須磨宛外務省電報、SRDI, p.19.834.
- (150) フィリピンにおける日本の文化政策の詳細については、参照、Theodoro A. Agoncillo, *The Fateful Years. Japan's Adventure in the Philippines, 1941-1945*, 2 Vol., Quezon City 1965, pp.424-476.
- (151) 一九四二年九月二日付須磨電報、MS 一九四二年九月二五日付。
- (152) 一九四二年一〇月一日付須磨宛谷電報、SRDI, p.27.083; MS 一九四二年一〇月一四日付。
- (153) 一九四二年一〇月一九日及び一〇月三〇日付須磨電報、SRDI, pp.27.758-760; MS 一九四二年十一月七日及び十一月

一一日付。

- (154) MS 一九四二年一月二日及び二月八日付。
- (155) Pilsafl, op. cit., pp.221-222.
- (156) 一九四三年三月二七日付須磨宛谷電報、MS 一九四三年四月一日付。フィリピン問題に関する要約をも参照、MS 一九四三年五月二六日付。
- (157) 一九四二年六月一七日付須磨電報、SRDI, pp.24.339-341.
- (158) 一九四二年七月二日及び七月三日付須磨電報、外務省六三二六；SRDI, pp.24.432-438.
- (159) 一九四二年六月二七日付堀切電報、SRDI, p.24.291.
- (160) 一九四二年七月九日付須磨電報、SRDI, p.24.615.
- (161) 一九四二年七月一〇日付須磨電報、外務省六三二六；SRDI, p.24.669.
- (162) 一九四二年一〇月二日付須磨電報、SRDI, pp.26.860-861.
- (163) 一九四二年一〇月三日及び一〇月四日付須磨電報、SRDI, pp.26.896-897.
- (164) 一九四二年一〇月五日付須磨電報、SRDI, pp.26.930-931.
- (165) 一九四二年十二月三日付須磨電報、SRDI, p.29.335.
- (166) 一九四三年一月七日付須磨電報、SRDI, p.29.865.
- (167) 一九四三年一月九日付須磨電報、SRDI, pp.30.170-171.
- (168) とりわけ新ドイツ大使フォン・モルトケとの一九四三年一月三日の会談を参照、一九四三年一月二四日付モルトケ電報、ADAP E V, Nr.71.
- (169) ホルダナとイギリス大使ホーアとの一連の会談の記録および交換覚書を参照、Hoare, a.a.O., S.305-322.
- (170) Ebenda S.314.
- (171) これに關しては、ADAP E V, Nr.187, 272; E. VI, Nr.3, 16, 22, 99; Ruhl, a.a.O., S.211-217. を参照。
- (172) 一九四三年四月一四日及び四月二七日付ソントナー電報、Bundesarchiv-Militärarchiv, Generalstab des Heeres, Op. Abt. II, Allgemein-V, Chef, Bd.II.
- (173) Bernd Martin, *Deutschland und Japan im 2. Weltkrieg*, Göttingen 1969, S.274-76. 防衛庁防衛研修所戦史室編『大本營陸

- 軍部 六】朝雲新聞社、一九七三年、五〇四—五〇六頁（野村直邦の回想）。
- (174) MS 一九四五年四月二日付。
- (175) MS 一九四五年四月三〇日付。
- (176) 一九四三年二月三日付須磨電報、SRDJ, pp.32.283-284.
- (177) 一九四三年三月四日及び三月八日付須磨電報、SRDJ, pp.32.327, 32.335.
- (178) 一九四三年三月三日付須磨電報、SRDJ, p.32.509.
- (179) 一九四三年三月一七日及び三月二〇日付加瀬（ローマ）電報；一九四三年三月一三日、三月一六日及び三月一七日付大島電報；一九四三年三月一九日付原田（パチカン）電報、SRDJ, pp.32.666-667, 32.692, 32.777, 32.837, 32.936-938, 32.940；一九四三年二月一六日付須磨宛大島電報、SRDJ, pp.32.926-927.
- (180) 一九四三年三月一六日付須磨宛大島電報及び一九四三年三月一六日付外務省宛大島電報、SRDJ, pp.32.926-927, 32.936-938.
- (181) 一九四三年三月三日付外務省宛須磨電報及び一九四三年三月二日付大島宛須磨電報、SRDJ, pp.32.509, 32.935.
- (182) 一九四三年三月一六日付須磨電報、SRDJ, p.32.665.
- (183) この七月二八日の会談については、参照、一九四三年七月二九日付ハル宛ヘイス電報、FRUS 1943, II, pp.611-617, 主に p.615. より詳細には、参照、Hayes, a.a.O., S.161. イギリス大使ホーアが長期休暇でロンドンに帰国する直前の一九四三年八月二〇日の会談でも、フランコは日本人への軽蔑をあらわにしている。Hoare op. cit., p.366.
- (184) 一九四二年一月二日付須磨電報、SRDJ, p.19.619.
- (185) 一九四三年一月九日付須磨電報、MS 一九四三年一月二五日付。
- (186) 一九四三年四月九日付谷電報、MS 一九四三年四月二日付。
- (187) MS 一九四三年五月七日及び五月九日付。
- (188) MS 一九四三年五月二六日付。
- (189) 一九四三年六月一日及び七月一日付須磨宛重光電報、MS 一九四三年七月五日付。
- (190) この一九四三年七月五日の須磨とホルダナの会談については、参照、MS 一九四三年七月一四日付。
- (191) たとえば独立付与計画に関する陸軍の一九四三年八月二七日付草案を参照、外務省外交史料館「比島独立と日比同盟

条約締結関係。

- (192) 一九四三年一〇月一四日付須磨電報、外務省外交史料館「昭和十八年一〇月比島独立承認並に日比同盟条約締結関係」。須磨との会談の二日後ホルダナは、この問題は未決であるが現在調査中であると通知している。一九四三年一〇月一九日付須磨電報、同上所収。
- (193) この問題でおそらくもともとの責任のあった元スペイン外務省政務局長の弁明をも参照せよ。José María Doussinague, *España tenía razón (1939-1945)*, Madrid 1950, pp.281-282.
- (194) 上の「レナナル事件」の「レナナル」参照。James W. Contada, "Spain and the Second World War", in: *Journal of Contemporary History*, Vol.5, Nov.1970, pp.65-75; Ders., *Relaciones España-USA 1941-1945*, Barcelona 1973, p.40-57; Doussinague, op. cit., pp.280-290; Hayes, op. cit., pp.187-191. 上のほかFRUS 1943, II, pp.722-738 の諸史料をも参照。
- (195) MS 一九四三年一月一日及び一月二十六日付。一九四三年一月の「マジック・サマリー」はマイクロフィルム版には収録されていない。
- (196) 一九四三年一月五日付重光宛須磨電報、MS 一九四三年一月一日付。
- (197) 一九四三年一月一日付重光電報、MS 一九四三年一月二十六日付。
- (198) 一九四四年四月二九日付の合意。Hoare, a.a.O., S.421-433, 466f.
- (199) MS 一九四四年五月八日、五月十五日、五月十六日及び五月二十五日付。
- (200) Alcazar de Velasco, *Memorias*, pp.187-188; Velasco-NHK: *El País*; Wilcox, a.a.O., S.134. ベラスコのスペインからの逃走については、参照。一九四四年七月六日付須磨電報、MS 一九四四年七月二日付。この史料によればベラスコはドイツ当局との取り決めに基づいて国境を越えてフランスに渡った。ベラスコ自身の描写 (Alcazar de Velasco, *Memorias*, p.188) によれば、彼はドイツのUボートで連合国の支配する海峡を越えるという無謀な行程をとり、無事にハンブルクに入港したという。また、彼の主張によれば、彼は一九四五年四月末までベルリンのヒトラーの塹壕で耐え抜いたといふ (Alcazar de Velasco, *Memorias*, pp.196-205); 一九四九年七月七日付クレープス宛ベラスコ書簡ともに疑ってかかる必要がある。
- (201) 一九四五年二月二日付須磨電報、SRDI, pp.90.973-976.
- (202) 一九四五年三月二七日付須磨宛大島電報、SRDI, p.95.360. この電文の中ではベラスコの名前はあげられておらず、「特

務機関長」と記されている。

- (203) 一九四五年三月二八日付大島宛須磨電報` SRDJ, p.95.959.
- (204) 一九八九年七月七日付クレープス宛ベラスロ書簡。
- (205) 一九四五年三月二九日及び三月三〇日付大島電報` SRDJ, pp.95.704, 95.886.
- (206) 一九八九年七月七日付クレープス宛ベラスロ書簡。
- (207) Ebenda.
- (208) 一九四五年四月一日付須磨電報` SRDJ, pp.97.870-871.
- (209) Alcazar de Velasco, *Memorias*, pp.205-227; Velasco-NHK.
- (210) 一九八九年七月七日付クレープス宛ベラスロ書簡。
- (211) MS 一九四四年一月二二日付。
- (212) 一九四四年一月二二日付フィリピン駐在村田大使宛重光電報` MS 一九四四年一月二四日付。
- (213) 一九四四年二月一日付須磨宛重光電報` MS 一九四四年二月一〇日付。
- (214) 一九四五年一月二五日付須磨電報` SRDJ, pp.90.617-618.
- (215) 一九四五年二月二二日付須磨宛重光電報` SRDJ, pp.91.317-318.
- (216) トニラをめぐる戦闘とスペインの損害について 参照` Agoncillos, op. cit., pp.862-867; Doussinague, op. cit., pp.346-348.
- (217) 一九四五年四月九日付須磨電報` SRDJ, pp.99.600-605. 須磨「情報秘話」一三三頁。
- (218) 一九四五年三月一七日付須磨電報` SRDJ, pp.94.544-546.
- (219) 一九四五年三月二二日付須磨電報` SRDJ, pp.95.348-351.
- (220) Ebenda, SRDJ, pp.95.352-353.
- (221) 一九四五年三月二六日付須磨宛重光電報` SRDJ, p.95.014.
- (222) 一九四五年三月三三日付須磨電報` SRDJ, pp.95.501-505.
- (223) 一九四五年三月三一日付大島宛重光電報` SRDJ, p.95.864.
- (224) 一九四五年四月五日付須磨宛重光電報` SRDJ, pp.98.493-494.

- (225) 一九四五年四月九日付須磨電報、SRDI, pp.99,600-606.
- (226) 一九四五年四月一日付須磨電報、SRDI, pp.97,870-872.
- (227) 一九四五年四月二日付須磨電報、SRDI, pp.98,425-430.
- (228) 一九四五年四月二六日付外務省回状、SRDI, pp.99,646-647.
- (229) 一九四五年四月二八日付須磨電報、SRDI, pp.104,085-086.
- (230) Memorandum by Paul T. Culbertson, Head of the Division of West European Affairs, NARA, State Department Files, 740.00119 P.W./8-1845, 1945, 2345.
- (231) Alcázar de Velasco, *Memorias* pp.221, 228-247; ders., *La gran fuga*, p.4; Gutiérrez, op. cit., p.14; Wilcox, op. cit., p.134-135. Ladislav Farago, *Afermath. Martin Bormann and the Fourth Reich*, London 1976, pp.377-379. 一九六〇年のヒトラーは西の生涯におけるこのエピソードについて一冊の本を書いているが、本稿では利用し得なかった。
- (232) 当時アメリカ情報当局の協力者であったフアラゴの判断をも参照。註231と同じ。
- (233) Gutiérrez, op. cit., p.16. ベラスコは、戦後CIAのために活動したことはないとしているが、他のアメリカ情報組織のために働いたことはあると認めている。一九八九年五月六日付クレープス宛ベラスコ書簡。
- (234) 須磨弥吉郎『外交秘録』(商工財務研究会、一九五六年)、二四一—二四六頁。
- (235) 須磨は一九五三年四月に改進黨の代議士となった。改進黨は他の諸政党と合同し、最終的には一九五五年に自由民主党に合流した。改進黨は重光葵(一九四三—四五年および一九五四—五六年に外相)に率いられていた。重光はかつて職業外交官として須磨の同僚であったが、須磨よりも年齢は上で、しかも重要な地位を占めていた。

へ訳者あとがきへ

本訳文は、Gerhard Krebs, *Japan und Spanien 1936-1945*, OAG-aktuell Nr.32, Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 1988, に、新史料を加えて著者ゲルハルト・クレープス教授自身が大幅に加筆した原稿を、田嶋信雄・井出直樹が翻訳したものである。著者が加筆した原稿はオリジナルの二倍以上の分量となっており、したがって、本訳文は、当該テーマに関するクレープス教授のいわば定稿であるといえる。翻訳は、週一回、田嶋と井出がそれぞれの訳稿を持ち寄り、つきあわせて検討するという方法で行った。

なお、本訳文の原論文では、戦中期にアメリカ合衆国が日本の外交電報を傍受して作成したいわゆる「マジック文書」など英語史料が多用されており、本来であればこうした傍受史料の基となった日本語のオリジナル外交文書(外務省外交史料館などに断片的に保存されている)に当たって当該日本語原文を引用すべきであろうが、そうした作業には多大な時間と労力が必要であり、現時点では見送らざるをえなかった。クレープス教授と読者のご寛恕をお願いしたい。

著者ゲルハルト・クレープス氏は一九四三年フルシャワに生まれ、ハンブルク大学・フライブルク大学・ボン大学および東京の上智大学で歴史学・独語独文学・日本語を学び、一九八二年にフライブルク大学史学科ベルント・マルティン教授の下で論文 *Japans Deutschlandpolitik 1935-1941* を執筆し、博士号を取得した。一九八一年から八六年まで早稲田大学講師、一九八七年から一九九九年までフライブルク大学史学科助手、東京ドイツ日本学研究所研究員・ドイツ軍事史研究所(ポツダム)研究員などを歴任、二〇〇〇年にはハンブルク大学日本学科に論文 *Japan im Pazifischen Krieg: Herrschaftsstruktur und politische Willensbildung* を提出、教授資格を授与された。現在ベルリン自由大学日本学科で客員教授を務めている。

クレープス教授は、日本の国際政治史学界では、特にその博士論文を基とした著書 *Japans Deutschlandpolitik 1935-1941. Eine Studie zur Vorgeschichte des Pazifischen Krieges*, Hamburg 1984 でことに有名である。この著書は、堪能な日本語を駆使して収集した膨大な第一次史料を、伊藤隆東京大学名誉教授の「革新派」理論を援用しつつ分析・整序し、戦前期日本の対ドイツ政策をきめ細かく描写したところに特徴があり、クレープス氏はこの著書により一九八七年に「東京OAG賞」を授与されている(ちなみに、本訳稿の基となった *Japan und Spanien 1936-1945* は、その受賞記念講演としてクレープス氏が一九八七年九月三〇日に東京のドイツ文化会館で行った講演の記録である)。

その後クレープス氏は、堪能な英語・日本語・ポーランド語・スペイン語・イタリア語などを駆使し、第二次世界大戦期

国際政治史の分野で極めて精力的に実証的かつオリジナリティあふれる業績を発表されている。

本稿「第二次世界大戦下の日本とスペイン関係と諜報活動」も、氏の多面的な関心の一端を示すものといえる。訳者は、当該テーマに関する関連論文が少ない中、本論文を読んで多くを教えられた。幸いクレープス教授の同意とさらなる加筆を得て、この間訳出を進めることが出来た。本訳稿が日本の国際政治史学界にも寄与するものと期待したい(田嶋信雄・記)。

(ゲルハルト・クレープス 〓 ベルリン自由大学客員教授)

(たじま・のおお 〓 本学教授)

(いで・なおき 〓 本学大学院法学研究科博士後期課程)